

ふるさとから挑戦

第48話 本物の誇り

③

(敬称略)

柔らかな白い木肌が芳香を放つ。宮殿や須弥壇の細工には、彫刻刀の細やかな動きが見える。精巧な造りに目を凝らさずとも、くぎが使われていないことは一目瞭然だ。

「木地見せ」

美川仏壇を注文した客にはまず、素材の品質を確認してもらったために「木地見せ」をする。客はこの美しい木地に感嘆するのが常だ。中田木工房の中田明生(59)は「めっこめざらし、どこを見てもらっても構わないよ」と胸を張る。

1998(平成10)年、美川仏壇に認定書が発行されるようになり、横行する偽造品に一線を画し

た。職人たちが許せなかったのは、不正な表示で高額な偽造品が売られている現実だった。

美川仏壇組合(当時)

は、チラシや店頭で偽造品を見つけては、販売店に抗議を重ねてきた。しかし、法的根拠も拘束力もない。「堪忍してよ。ほかもやってるよ」。悪びれもせず「美川」を名乗り続ける店を、どうすることもできなかった。

2005年、組合長の北島与八郎(78)は、商工担当の石川県職員から、地名と商品名を組み合わせた「地域団体商標」(地域ブランド)の登録を持ち掛けられた。翌年4月

地域ブランド認定 偽造品を駆逐

の商標法改正で、手続きが簡略化されるという。「これなら偽の表示を罰則対象とすることもできる」

組合員たちはさすがの思いで準備に乗り出した。そして06年4月20日、地域ブランドの出願に合わせ、従来の任意組合を

「美川佛壇協同組合」と改め、創立総会を開いた。

「不正販売をした店は組合に入れない」。表示を偽って県外産の仏壇を販

売した店は除名の憂き目に遭った。仲間であって

も厳しく臨んだ苦渋の決断は、ふてぶてしく生き

延びる偽造品への強い意

志の現れだった。

鑑定委も活動

翌年6月、特許庁から県内17件目の地域ブランド認定を受けた。同時に、組合正会員15人で美川仏壇の真贋を見極める「鑑定委員会」も動きだす。

偽物に対する美川の厳し

い姿勢は業界でも評判となり、あれほど広まっていた偽の「美川仏壇」はいつしか市場から消えてなくなった。

北島は組合員が一丸となつて偽物に立ち向かった日々を振り返る。「実を言つとね、偽物には、感謝をしとるところもあるんや。今やからこそ言えることやけど」。

あれほどまで苦しめられた偽造品の存在が皮肉にも、職人たちのこだわりを呼び覚まし、結果として美川仏壇の信用性を高めた。北島ならずとも、偽物の登場は、これを駆逐することで結束した産地の強みを再確認する「事件」といえた。

購入客に見せられる仏壇の木地。品質に偽りがない証明となる「白山市美川中町



(藤本典子)